

(三〇一九年度)

# 1 国語問題 (六〇分)

(この問題冊子は17ページ、三問である。)

## 受験についての注意

- 一、試験監督者の指示があるまで、問題冊子を開いてはならない。
- 二、試験開始前に、試験監督者から指示があったら、解答用紙の右上の番号が自分の受験番号と一致することを確認し、所定の欄に氏名を記入すること。次に、解答用紙の右側のミシン目にそって、きれいに折り曲げてから、受験番号と氏名が書かれた切片を切り離し、机上に置くこと。
- 三、試験監督者から試験開始の指示があったら、この問題冊子が、右に記したページ数どおりそろっていることを確かめること。
- 四、筆記具は、HかFかHBの黒鉛筆またはシャープペンシルに限る。万年筆・ボールペンなどを使用してはならない。時計に組み込まれたアラーム機能、計算機能、辞書機能を使用してはならない。また、スマートウォッチなどのウェアラブル端末を使用してはならない。
- 五、解答は、解答用紙の各問の選択肢の中から正解と思うものを選んで、そのマーク欄をぬりつぶすこと。
- 六、マークをするとき、マーク欄からはみ出したり、白い部分を残したり、文字や番号、○や×をつけたりしてはならない。また、マーク箇所以外の部分には何も書いてはならない。
- 七、訂正する場合は、消しゴムでいいいに消すこと。消しゴムはきれいに取り除くこと。
- 八、解答用紙を折り曲げたり、破ったりしてはならない。
- 九、試験監督者の許可なく試験時間中に退場してはならない。
- 十、解答用紙を持ち帰ってはならない。
- 十一、問題冊子は必ず持ち帰ること。

□  
次のA、Bを読んで、後の間に答えよ。

A

ここで近代科学の方法論としての仮説演繹法えんぎの内容に立ち入る前に、演繹法と帰納法のそれぞれの長所と短所について考察しておこう。演繹法<sup>1</sup>(deduction)とは、普遍的命題(前提)から個別的命題(結論)を論理的に導き出す方法である。その典型は数学における論証、とりわけ幾何学的証明(たとえば、ユークリッドの『原論』)の中に見ることができ。つまり、一群の公理(前提、普遍的命題)から一つ一つステップを踏んで個々の定理(結論、個別的命題)を導き出すという手続きが演繹法にほかならない。演繹法の特徴は、前提(公理)が結論(定理)を必然的に(例外なく)帰結することにある。それゆえ、前提が正しければ、結論は必ず正しい。しかし、結論は前提のうちすでに暗示的に含まれていたものを明示的に取り出したものにすぎず、演繹法によつて知識を拡張すること、すなわち新しい知識を獲得することはできない。

このような演繹法に対して、アリストテレスは他方の帰納法を「帰納は個々のものどもから一般的なものへの上昇の道である」と定式化している。つまり、帰納法(induction)とは個別的命題(前提)から普遍的命題(結論)を導き出す論証のことである。演繹法とは反対に、帰納法は知識を拡張することはできるが、前提と結論との関係は必然的ではなく、蓋然的(確率的)なものにとどまる。この点を一つの事例で考えてみよう。

たとえば「カラスAは黒い」「カラスBは黒い」……「カラスZは黒い」という有限個の観察事実(前提)から、「すべてのカラスは黒い」という普遍的法則(結論)を導き出す帰納的論証を取り上げよう。この結論「すべてのカラスは黒い」は全称命題(「すべてのSはPである」という形の命題)であり、そこには過去・現在・未来のあらゆるカラス(無限個)が含まれている。すると、前提となる観察事実は有限個であるのに対し、結論として導出された普遍的法則は無限個のカラスに言及しているのであるから、前提と結論の間には有限から無限への推論という<sup>3</sup>「X」が存在することになる。つまり、この論証は将来においてどこかで「白いカラス」が発見される可能性を完全に排除することはできない。それゆえ帰納的論証の結論は必然的ではな

く、一定の確率でその法則が成立するという蓋然的な主張にとどまるのである。

このことを捉えて、帰納法が妥当な論証ではないことを指摘したのは、イギリスの哲学者D・ヒュームであった。彼は「Aが起こればBが起これる」という帰納法に基づく因果的知識には正当な根拠はなく、原因と結果の結びつきは両者の「空間的近接」、「時間的継起」および「恒常的連接」に基づいて形成されたわれわれの「心の習慣」にすぎないものと考えた。科学理論を構築する基盤である帰納法が蓋然的な結論しかもたらさないということから、ヒュームは科学知識の確実性を疑い、最終的には懷疑論に達したのである。

しかし、科学研究の現場では帰納法なしで済ますわけにはいかないし、また科学が経験科学である限り、数学や論理学など形式科学のように、演繹的論証のみに頼ることはできない。したがって、帰納法が演繹法と同じ程度の確実性をもちえないとしても、少なくとも十分信頼するに足る科学の方法であることを哲学者たちは示そうと試みてきた。その代表者がJ・S・ミルである。彼は帰納法を支える原理または公理として「自然の経路の斉一性 (the uniformity of the course of nature)」を提唱した。これは、「ひとたび生じたことは、十分に類似した状況のもとでは再び生じ、再びどこか同じ状況が繰り返されるたびごとに生じるであろう」ということを意味する。つまり、自然界を観察して同じような状況のもとで一定の現象が生じれば、それ以後も将来にわたって何度も繰り返されると考えてよい、という原理である。この原理に基づけば、自然は統一ある秩序によって支配されているのだから、帰納法は十分に信頼できる妥当な結論を導く、という保証が与えられることになる。

しかし、この「自然の斉一性」がア・プリオリ(経験に先立つ)な原理だとすれば、それは経験科学の方法とは言えず、一種の形而上学的原理となるほかはない。他方、もし経験的原理だとすれば、その正しさは帰納法によって論証されねばならず、「帰納法の妥当性を保証する自然の斉一性の正しさを論証するために帰納法を必要とする」とこととなって「Y」に陥る。

このようにして、論証方法としての帰納法の正しさを根拠づけることは、「帰納法の正当化」の問題として多くの哲学者が挑戦してきたが、残念ながいずれも成功はしなかった。

十九世紀になると、ジョン・ハーシエルが『自然哲学研究に関する予備的考察』（一八三〇年）において仮説演繹法を明確な形で定式化するにいたる。彼の言葉を借りれば、「科学的探究が成功を収める過程では、帰納的方法と演繹的方法の双方を交互に使用することが絶えず求められている」のである。その後、W・ヒューエルやW・ジェヴォンズらによってさらに洗練されていった仮説演繹法は、今日では以下のようなステップを踏むものと考えられている。

- (1) 観察に基づいた問題の発見
- (2) 問題を解決する仮説の提起
- (3) 仮説からのテスト命題(予測)の演繹
- (4) テスト命題の実験的検証または反証
- (5) テストの結果に基づく仮説の受容、修正または放棄

明らかに、(1)から(2)へいたる過程では帰納法が、(2)から(3)へいたる過程では演繹法が用いられている。このようにして仮説演繹法は帰納法と演繹法とを組み合わせて両者の欠陥を補い、さらに演繹のもつ比重を高めることによって、帰納法のもつ不確実さをある程度まで補正することができた。しかし、仮説演繹法といえども有限回のテストを通じて仮説を確立する方法である限り、そこで得られた一般法則は、やはり蓋然性を免れるわけにはいかない。それは、一定の確率で法則が成り立つことを保証するにとどまるのである。

だが考えてみれば、自然科学が経験科学である以上、それが常に「新しい経験」に対して開かれているのは当然のことである。仮説は、たとえそれが実験的に検証されたとしても、修正を免れた絶対的真理の資格を獲得するわけではない。予測のつかない新たな経験によって仮説が反証される可能性は常に残っているのである。それゆえ、自然科学の法則に数学や論理学と同等の論理的必然性を求めることは無いものねだりと言わねばならない。その意味で、科学理論や科学法則は永遠に「仮説」の身分にとどまるのであり、それは常に経験的テストによる修正や廃棄の可能性に身をさらしているのである。

〔注〕 D・ヒューム：スコットランド出身の哲学者（一七一―一七七六）。 J・S・ミル：イギリスの哲学者（一八〇六―

一八七三）。 ジョン・ハーシェル：イギリスの天文学者（二七九二―一八七二）。 W・ヒューエル：イギリスの哲学者

（二七九四―一八六六）。 W・ジェヴォンズ：イギリスの経済学者、論理学者（一八三五―一八八二）。

問一 傍線部1および本文の説明に基づいて、次の推論の中から演繹法を用いた推論を二つ選べ。

a 今までに調べた三角形の内角の和は全て一八〇度であった。したがって、三角形の内角の和はどのような三角形でも全て一八〇度である。

b その本屋で今までに買った本は全て面白かった。したがって、その本屋で次に買う本も面白いだろう。

c 三角形の内角の和は、どのような三角形でも全て一八〇度である。したがって、いま調べている三角形の内角の和も一八〇度である。

d カラスAは黒い。カラスBも黒い。カラスCも黒い。したがって、全てのカラスは黒い。

e 全ての人間はいつか死ぬ。ソクラテスは人間である。したがって、ソクラテスはいつか死ぬ。

問二 傍線部2のような結論がなぜ出てくるのか。その理由としてもっとも適切なものを次の中から一つ選べ。

a 演繹法は、幾何学的証明にのみ必要な一群の公理から個々の定理を導き出すという手続きにすぎないから。

b 演繹法は、一つ一つステップを踏んで個々の結論を導き出すにあたって前提との関係が必然的でないから。

c 演繹法は、無限個の普遍的命題を一つ一つステップを踏んで有限個の観察事実から導き出す手続きにすぎないから。

d 演繹法は、前提となっている普遍的命題の中にすでに含まれている内容を論理的に導き出すにすぎないから。

問三 文中の空欄「X」に入る語としてもっとも適切なものを次の中から一つ選べ。

- a 演繹的矛盾
- b 帰納的飛躍
- c 幾何学的証明
- d 観察的事実

問四 傍線部4について、なぜヒュームは科学知識の確実性を疑ったのか。次の中からもっとも適切なものを一つ選べ。

- a 演繹法によって知識を拡張し新しい知識を獲得することはできず、普遍的命題は論理的に導き出すしかないから。
- b 帰納法は知識の拡張はできるが、その結果得られる個別的命題は蓋然的であり、論理的に導き出すことができないから。

- c 帰納法に基づく因果的知識には正当な根拠がなく、原因と結果の結びつきはわれわれの「心の習慣」にすぎないから。
- d 「帰納法の正当化」の問題に過去の多くの哲学者が挑戦してきたにもかかわらず、いずれも成功はしなかったから。

問五 傍線部5について、なぜ科学研究の現場では帰納法なしで済ますわけにはいかないのか。その理由としてもっとも適切なものを次の中から一つ選べ。

- a 「空間的近接」、「時間的継起」などに基づいて形成されたわれわれの「心の習慣」だけでは科学として不十分だから。
- b 演繹法だけでは知識を拡張して新しい知識を獲得することはできず、知識の拡張のためには帰納法が必要だから。
- c 普遍的命題から個別的命題を必然的に導き出す演繹法だけでは、蓋然的主張を論理的に導くことができないから。
- d アリストテレスが「帰納は個々のものどもから一般的なものへの上昇の道である」と公理として定式化しているから。

問六 傍線部6の「自然の斉一性」とは簡単に言うところのような考えか。次の中からもっとも適切なものを一つ選べ。

- a 自然はどのような条件下でも同一の現象が将来にわたって一斉に生じるようにできているという考え。
- b 自然における現象は、一定の確率で法則が成立するという蓋然的結論を支持しているという考え。
- c 自然においては現象が一樣に生じているので、公理としての帰納的論証が妥当な結論を導くという考え。
- d 自然は統一ある秩序に支配されていて、同じような条件の下では一定の現象が生じるという考え。

問七 文中の空欄

「 Y 」

に入る語としてもっとも適切なものを次の中から一つ選べ。

- a 循環論法
- b 論理矛盾
- c 三段論法
- d 試行錯誤

問八 傍線部8で述べられていることを明確に述べ直すとどうなるか。次の中からもっとも適切なものを一つ選べ。

a 観察によって発見された問題を解決するための仮説の提起を帰納法によって必然的に導く。そして、その仮説から蓋然的に成立するテスト命題(予測)を演繹法によって論理的に導き出す。

b 観察によって発見された問題を解決するために帰納法を用いて蓋然的な仮説を立てる。そして、その仮説から演繹法によって新しい知識(予測)を獲得するための論証を行う。

c 観察によって発見された問題を解決するために帰納法によって普遍的な仮説を立てる。そして、その普遍的な仮説(普遍的命題)から個別的テスト命題(予測)を演繹法によって論理的に導き出す。

d 観察によって発見された問題を解決するために帰納法によって普遍的命題から個別的命題(仮説)を導き出す。そして、その個別的命題をテスト命題(予測)として演繹法によって導き出す。

問九 傍線部9で述べられていることの趣旨は何か。次の中からもっとも適切なものを一つ選べ。

a 仮説演繹法における仮説は、演繹によって論理的に導き出された個別的命題であり、たとえそれが実験的に検証されても、予測のつかない新たな経験によって得られる普遍的命題とは言えないということ。

b 自然科学(経験科学)における仮説は、数学や論理学の定理がもつ論理的必然性はず、たとえそれが実験的に検証されても、予測のつかない新たな経験によって修正・反証される可能性が常に残っているということ。

c 仮説演繹法は帰納法と演繹法とを組み合わせて両者の欠陥を補った方法であり、数学や論理学の定理に対しても、予測のつかない新たな経験によって修正・反証される可能性を常に残しているということ。

d 自然科学(経験科学)における仮説演繹法は、演繹のもつ比重を高めることによって、帰納法の不確実さを補正することができたので、実験による検証は絶対的真理の資格の獲得のためには不必要であるということ。



問十 本文の内容と合致しないものを次の中から二つ選べ。

- a 「自然の斉一性」によって「帰納法の正当化」の問題は解決することができる。
- b 仮説演繹法によって帰納法の不確かさがある程度まで補正することができる。
- c 自然科学の法則に数学などと同等の論理的必然性を求めるのは原理的に誤りである。
- d 演繹法は知識を拡張することができないので、科学の方法としては望ましくない。
- e 帰納的論証の結論には必然性は保証されず、常に蓋然的な主張にとどまる。

二

次の文章は『狭衣物語』の一節である。狭衣は内裏からの帰り道、不審な女車に遭遇する。この車は狭衣の乗った車を先に行かさなかつたので、狭衣の隨身がとがめて詰め寄ると、中から法師が飛び出してきた。これを読んで後の間に答えよ。

法師<sup>1</sup>をば逃がして、牛飼童<sup>うしなわらは</sup>を捕へつつ、「何者ぞ」と問へば、「仁和寺に某<sup>なまがし</sup>威儀師と申す人なり。年頃、懸想したまへる人の、太秦に日頃籠りたまへるが、出でたまふとて車借りたまへれば、喜びながら奉りたまひて、姫君一人を盗みて、率ておはするなり。法師だてら、かくあながちなるわざをしたまへば、仏の憎みたまひてかかるめを見せたまふなり。荒牛にてはあり、押し留めても寄るべきを、年頃の思ひかなひて急ぎたまふほどに、女車とぞ見るらん、ただとくとく遣れ、と責めたまへば、師には従ふ、といふ法文を、僧のあたりにて年ごろありつるしには聞き知りさぶらひて、のたまふままに走らせはべりつるなり。今よりはさらさら<sup>2</sup>にこの師に使はれはべらじ」とて、いと恐ろしう悲しと思ひたるに、いとをかしうて許してけり。

君には、「しかしかなん申しつる。車にはまことに女の侍りつるなめり。人もみな逃げぬ。かくてうち捨てては、さすがにいとほしうこそさぶらひぬべけれ」と申せば、「何しにかは、かかるわざをばしつる。常に制することを聞かで。行くべからん所はいづくにてかあらん。いかでか、さは捨てん。その童に問ひて送れ」とのたまひて過ぎたまふに、また参りて、「女君の家はただこの大宮に候ひけり。暗うなるままに、いみじうこそ泣きたまへ。いかがつかうまつらんずる。童もまかりぬらん方も知らず。今、さりとて車取りに人參で来なん。このわたりにこそ隠れてさぶらふらめ。松持て参らで暗うなりはべりぬ。御車つかうまつれ」と言へど、かの車ならん、いかやうなる人にか、まことに心ならぬことならば、いかばかりわびしからん、暗き道の空にさすらはせるよ、かくて見捨てては、ありつる法の師、惑ひ来て、本意のままにせんとすらん、といとほしけれど、送るべき方は知らで、殿にや、今宵ばかり率て行きて、置きたまはしなど思すに、袈裟、さすが被きて走りつらん足もと思し出づるも、さすがにをかしうもゆゆしくも思さる。さても、かくて見捨てんはいとほしう、道のほども手や触れつらんと思すに、心づきなうゆゆしうて、飛鳥井に宿りせん、語らひにくく思さるれど、なほいかなる人の身にかとゆかしければ、御

車引き返し、かれに乗り移りて見たまへば、いとたどたどしきほどなれど、ひき被きて泣き伏したる人ありけり。<sup>6</sup>

〔注〕 ○威儀師…仏事の際、他の僧に作法を指図する僧。 ○大宮…大宮大路。 ○殿…狭衣の自宅。 ○飛鳥井に宿りせん

…催馬楽「飛鳥井」の「飛鳥井に宿りはすべし」を踏まえ、自宅に宿泊するよう申し出ることを言う。

問一 傍線部「法師」とあるが、この法師はなぜ女車に乗っていたのか。次の中からもっとも適切なものを一つ選べ。

a 姫君に懸想した法師は太秦の広隆寺に参籠していたが、寺から抜け出るために車を借りると、喜び車を走らせて、姫君を盗んできたところだったから。

b 懸想していた姫君が太秦の広隆寺に籠もったのが心配で、法師は仁和寺を出るために車を借り、牛飼童も喜んで協力して、姫君を寺から連れ出してきたところだったから。

c 法師と法師が懸想していた姫君はそれぞれ太秦の広隆寺に籠もっていたが、姫君が寺から出るといので法師は車を出して同乗し、姫君を盗み出したところだったから。

d 懸想していた姫君が、参籠していた太秦の広隆寺から帰るので車を所望したのをいいことに、法師は車に姫君だけを乗せて盗み出したところだったから。

問二 波線部ア～エのうち、主語が他の三つと異なるものを一つ選べ。

a ア b イ c ウ d エ

問三 傍線部2「あながちなるわざ」とは何か。次の中からもっとも適切なものを一つ選べ。

- a 狭衣の乗った車を先に行かせなかったこと。
- b 車から逃げ出したこと。
- c 姫君を盗み出したこと。
- d 太秦の広隆寺に参籠したこと。

問四 傍線部3「女車とぞ見るらん」とはどういうことか。次の中からもっとも適切なものを一つ選べ。

- a 向こうの車も女車のようだから、脇に止めなくてもいいだろうということ。
- b 向こうはこちらの車を女車と見て、大目に見てくれるだろうということ。
- c 向こうはこちらを女車だろうかと不審に思っただけで見るだろうということ。
- d 向こうの車も女車のようなので、こちらの事情を察してくれるだろうということ。

問五 傍線部4のように牛飼童が言った意図はなにか。次の中からもっとも適切なものを一つ選べ。

- a 師の教えを忠実に守る誠実な弟子であることを印象づけようとしている。
- b 師には従うという教えを馬鹿正直に守ったことを反省し、申し訳なく思っている。
- c 師である法師に従っただけだと、全ての責任を法師に押しつけようとしている。
- d 師には従うという教えを実践できたことを誇りに思っている。

問六 二重傍線部K、L、M、Nのうち活用形が他の三つと異なるものを一つ選べ。

- a K
- b L
- c M
- d N

問七 傍線部5「童もまかりぬらん方も知らず」の意味としてもつとも適切なものを次の中から一つ選べ。

- a 牛飼童が逃げ出して行った方向も分からない。
- b 牛飼童もこの女君の行き先は分からない。
- c 牛飼童も法師がどこへ行ったか分からない。
- d 牛飼童も逃げ出す方法が分からない。

問八 狭衣が女君に対してどう対処するのがよいか悩む過程で、狭衣が考えたこととして適切でないものを二つ選べ。

- a あの車に乗っている女君はどんな素性が興味がある。
- b 本当に不本意な誘拐だったのだろうか。示し合わせて逃げてきたのではないか。
- c 逃げる時に袈裟を被った法師の姿を思い出すと、さすがに風流さも感じる。
- d 道中、法師が女君に手出したのかと思うと不愉快で忌まわしい。
- e 暗い夜道に女君を放っておいたら、法師が来て思いのままにするかもしれない。
- f 女君をどこに送ったらいいか分からないので、自宅に連れて行こうかと思う。
- g 自宅に来るよう女君に勧めるのも言い出しにくい。

問九 傍線部6「人」と同一人物を指すものを二重波線部P～Sから一つ選べ。

- a P
- b Q
- c R
- d S

三

次の文章を読んで、後の問に答えよ。なお、設問の関係上、返り点・送り仮名を省いたところがある。

永有<sup>ニ</sup>某<sup>リ</sup>氏<sup>ナル</sup>者<sup>一</sup>、畏<sup>レ</sup>日<sup>1</sup>拘<sup>レ</sup>忌<sup>レ</sup>異<sup>ニ</sup>甚<sup>ダシ</sup>。以<sup>テ</sup>為<sup>ラ</sup>己<sup>ノ</sup>生<sup>レ</sup>歳<sup>直</sup>直<sup>レ</sup> X <sup>ニ</sup>鼠<sup>ハ</sup>、 X <sup>ノ</sup>神

也<sup>ト</sup>。因<sup>リ</sup>愛<sup>シ</sup>鼠<sup>ヲ</sup>不<sup>レ</sup>畜<sup>ニ</sup>猫<sup>犬</sup>。禁<sup>ジ</sup>僮<sup>ニ</sup>勿<sup>レ</sup> <sup>カラシム</sup>擊<sup>レ</sup>鼠<sup>ヲ</sup>。倉<sup>廩</sup>庖<sup>厨</sup>、悉<sup>ク</sup>以<sup>テ</sup>恣<sup>ニ</sup> <sup>ほしいまま</sup>鼠<sup>ヲ</sup>不<sup>レ</sup>

問<sup>ハ</sup>。由<sup>レ</sup>是<sup>2</sup>鼠<sup>相</sup>告<sup>皆</sup>皆<sup>来</sup>来<sup>ニ</sup>某<sup>氏</sup>。飽<sup>食</sup>而<sup>無</sup>無<sup>レ</sup>禍<sup>。某</sup>某<sup>氏</sup>室<sup>無</sup>無<sup>完</sup>完<sup>器</sup>、 <sup>い</sup>櫛<sup>無</sup>無<sup>完</sup>

衣<sup>。飲</sup>飲<sup>食</sup>大<sup>率</sup>鼠<sup>之</sup>余<sup>也</sup>。昼<sup>累</sup>累<sup>与</sup>与<sup>人</sup>兼<sup>行</sup>、夜<sup>則</sup>則<sup>窃</sup>窃<sup>鬻</sup>鬻<sup>鬪</sup>鬪<sup>暴</sup>。其<sup>ノ</sup>声

万<sup>状</sup>不<sup>レ</sup>可<sup>ニ</sup>以<sup>テ</sup>寝<sup>、終</sup>終<sup>不</sup>不<sup>厭</sup>。数<sup>歳</sup>某<sup>氏</sup>徙<sup>居</sup>居<sup>ニ</sup>他<sup>州</sup>。後<sup>人</sup>来<sup>居</sup>居<sup>、鼠</sup>

為<sup>態</sup>如<sup>故</sup>。其<sup>人</sup>曰<sup>、是</sup>是<sup>陰</sup>陰<sup>類</sup>惡<sup>物</sup>也<sup>、盜</sup>盜<sup>暴</sup>尤<sup>甚</sup>、且<sup>何</sup>何<sup>以</sup>以<sup>至</sup>是<sup>乎</sup>哉<sup>、</sup>

仮<sup>五六</sup>猫<sup>、闔</sup>闔<sup>門</sup>撤<sup>瓦</sup>灌<sup>穴</sup>、購<sup>僮</sup>羅<sup>捕</sup>之<sup>、殺</sup>鼠<sup>如</sup>如<sup>丘</sup>、棄<sup>之</sup>之<sup>隱</sup> <sup>ニ</sup>処<sup>、</sup>

鼻<sup>数</sup>数<sup>月</sup>乃<sup>已</sup>。

(柳宗元「永某氏之鼠」)

〔注〕○永…永州。唐代の地名。○忌…不吉なことを物忌みする。○僮…召使い。○倉廩庖廚…倉庫や台所。○櫛…衣紋掛け。○撤…取り除く。○灌…水をそそぐ。

問一 傍線部1「畏日拘忌」、3「完器」、4「終不厭」の意味として、もつとも適切なものを次の中から一つ選べ。

- 1 a 日々の吉凶を恐れ憚る<sup>はばか</sup>  
b 太陽を目にすることを嫌がる  
c 日常生活に嫌気が差す  
d 日にちが経過することを惜しむ
- 3 a 丈夫な食器  
b 使い勝手のよい食器  
c ひと揃いの食器  
d 齧<sup>かむ</sup>られていない食器
- 4 a とうとう満足に寝ることができなかった  
b まったく気にすることはなかった  
c けつきよく嫌いにはなれなかった  
d 最後まで食べ飽きることはなかった

問二 傍線部2「是」の内容として、もっとも適切なものを次の中から一つ選べ。

- a 某氏宅に犬や猫がいないため鼠にとつては安全であったこと。
- b 鼠が不吉な害獣とされず福の神とされたこと。
- c 某氏が鼠を大切にし駆除される恐れがなかったこと。
- d 倉や台所に食べ物がいっぱいであったこと。

問三 傍線部5「鼠為態如故」について、この状況を説明したものととして、もっとも適切なものを次の中から一つ選べ。

- a 鼠は愚かであったので、住人が変わったことに気付かず、このまま現状が維持されると思っていた。
- b 鼠は自分達の存在を過大視し、住人が変わっても駆除されることはない和高をくくっていた。
- c 鼠は平穩な生活に慣れてしまい、身に事故が降りかかることすら想起することができなくなっていた。
- d 鼠はいつの間にも現状に慣れてしまい、自分達が駆除される存在であることを忘れ去っていた。

問四 文中の空欄Xに入れるべき漢字を含む語句として、もっとも適切なものを次の中から一つ選べ。

- a 辛亥革命      b 甲子革命      c 戊辰戦争      d 乙巳之變

問五 波線部Y「而」の用法と同じものとして、もっとも適切なものを次の中から一つ選べ。

- a 貧<sub>レ</sub>而無<sub>レ</sub>怨難
- b 学<sub>レ</sub>而時<sub>レ</sub>習<sub>レ</sub>之
- c 任<sub>レ</sub>遠<sub>レ</sub>而道<sub>レ</sub>遠
- d 温<sub>レ</sub>故<sub>レ</sub>而知<sub>レ</sub>新



問六 波線部Z「曰」の内容はどこまでであるか、もつとも適切なものを次の中から一つ選べ。

- a 盜暴尤甚
- b 且何以至是乎哉
- c 闔門撤瓦灌穴
- d 購僮羅捕之

問七 この文章の内容を評したものととして、もつとも適切なものを次の中から一つ選べ。

- a 士志<sub>レ</sub>於道、而恥<sub>レ</sub>惡衣惡食者、未<sub>レ</sub>足<sub>レ</sub>与議<sub>レ</sub>也。
- b 余甚惑焉、儻所謂天道是邪、非邪。
- c 不知<sub>レ</sub>推<sub>レ</sub>己之本、而乘<sub>レ</sub>物以逞。
- d 形之危也類<sub>レ</sub>有德、声之宏也類<sub>レ</sub>有能。

問八 この文章の筆者と同時代の人で、文章家として並び称された人物を次の中から一つ選べ。

- a 杜甫
- b 歐陽脩
- c 韓愈
- d 蘇軾
- e 司馬光





